

二〇三三年三月一日

野遊びに飽きて頬張る握り飯  
親株を遠巻きにして名草の芽  
赴任地は海沿ひの町燕来る  
五百齡触れてあたたか椋大樹  
芹青き水に揺られて寂光土

かえる  
うつき  
ひのと  
はく子  
素 秀

二〇三三年三月九日

お手玉の転がつてをり雛の間  
重箱の中は宴や豆ひひな  
一輪車手を振り進む春堤  
トロ箱を狭しと跳ねる桜鯛

うつき  
うつき  
みきお  
智恵子

二〇三三年三月八日

酔いどれの千鳥足なる路地臍  
空を蹴り山を蹴り上げ半仙戯  
吊橋の足下に激つ雪解川  
地の温み残る夕餉の露の臺  
幾度も戦禍くぐりし古雛  
芹洗ふ泣く子を足に絡ませて  
芥なきみたらし川へ椿落つ

かえる  
よし子  
豊 実  
うつき  
澄 子  
ひのと  
明日香

二〇三三年三月七日

山吹の枝垂れ一溪明るうす  
大玻璃に展けて京の山うらら  
鉦くづ東風に飛ばさる寺普請  
河口から始まる春の月の道  
足掛けて飛び乗る小舟風光る  
うららかや焼き立てパンの並ぶ店

素 秀  
明日香  
なつき  
素 秀  
ひのと  
みきえ

二〇三三年三月六日

転んでは起こす自転車山笑ふ  
おんぶの子伸ばす右手に風車  
コンビニに絆ゆるめる老通路  
玉垣の狭しと宮の梅盛る  
遣さるる身の哀しさよ鳥帰る

ひのと  
かえる  
素 秀  
せつ子  
たか子

二〇三三年三月五日

海風に幟はためく梅の山  
逃げ水を追うて地団駄踏む子かな  
マイカーを洗ふ背中に揚雲雀  
藁舟のくるりとまはる流し雛

千 鶴  
素 秀  
素 秀  
あひる

二〇三三年三月四日

靴振れば小石がひとつ山笑ふ  
立話して満開の梅を見ず  
さざ波の夕日揉みある春の川  
黒猫と見しは陶器や花ミモザ  
流さずに家苞に買ふ流し雛  
春眠のつむじを見せて夢見顔

ひのと  
満 天  
はく子  
なつき  
明日香  
む べ

毎日句会みのる選・二〇三三年三月二日